

令和6年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

設定した課題に対して教職員全体で共通理解を図り、生徒の実態に応じた柔軟かつ効果的な取り組みにより、重点目標はほぼ達成できた。多様な生徒への対応についても教職員全体で情報共有し、SC・SSW や通級指導担当教員、外部の関係機関とも連携しながら、学校生活の様々な場面で支援することができた。

学習活動では、TNUD(となみ野ユニバーサルデザイン)としてコミュニケーションを大切にし、すべての生徒にわかりやすく、質問しやすい授業づくりを目指して授業改善を図った。アンケートでは「考えや疑問を伝える努力をした」が7月70%、12月77%と生徒の学ぶ意欲に成果が見られた。TNUDを意識した互見授業ではアンケート結果を集約し、有効な事例を共有できた。

学校生活では、スマホ等の適切利用推進運動を展開、各自の目標設定・自己評価により、目標達成度82%、行動に改善が見られた。様々な場面で命の大切さや交通安全の啓発にも努めた。また、生徒の実態に応じた健康講座を数多く実施、アンケートでは「健康意識が高まった」が93%、「自己理解を深めた」が96%で、心身の健康状態について関心を高める良い機会となった。

進路支援では、JSTと年次が連携し、きめ細かな指導を継続した。要支援生徒には外部機関と連携し、卒業生全員の進路目標を実現した。進路ガイダンスに加え、先輩講話や学校・企業見学、インターンシップなどを計画的に実施し、1年次89%、2年次97%が進路目標を明確にできた。

特別活動では、生徒会が主体となり、前年度アンケートを参考に行事を企画・運営することで、積極的参加による達成感は98%と高かった。図書委員会では様々な企画を工夫し、「一人一冊運動」を呼びかけたが貸出冊数は思うように伸びず、今後は読書の動機付けへの仕掛けが課題である。

総合福祉科では、福祉分野の専門技術者による各種講座や交流活動に加え、家庭科分野の講座や体験活動を例年より多く設定した。アンケートでは「福祉への興味関心が深まった」「生活を改善する知識・技術が身についた」がいずれも100%で、専門科目への学習意欲に成果が見られた。

7 次年度へ向けての課題と方策

- (1) ペアやグループで意見交換、タブレットの共有機能活用、教員に1対1で質問できるよう配慮など、アンケート結果による生徒のニーズを踏まえ、さらに発言しやすい環境を整えていく。
- (2) 命の大切やSNSについて学ぶ機会を設定し、生徒会とも協力して粘り強く指導を継続する。また、生徒の抱える問題についてはSCやSSWとも連携し、早期発見・対応に努める。
- (3) 就職希望者への支援は早期からJSTと連携し、学校全体で行う。特別な支援が必要な生徒の支援体制構築だけでなく、関係分掌や外部機関と連携し、本校に適したメソッドの定着を図る。
- (4) 生徒主体による企画・運営の継続を支援する。集団活動が苦手な生徒には年次と連携し、積極的な参加を促す。図書館は生徒目線の企画を工夫し、読書の動機付けと習慣化を図る。
- (5) 学んだ知識や経験を次に活かす系統的な指導計画を作成し、様々な専門講義や交流・体験活動を継続していく。自己・他己評価を通して生徒自身が成長を実感できる学習機会を設定する。

8 学校アクションプラン

令和6年度 となみ野高等学校アクションプラン -1-			
重点項目	学習活動		
重点課題	① 学習内容の理解・定着と学習意欲の向上	② 授業改善の推進	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 授業内容について理解・定着の乏しい生徒が見られる。 学習・授業に対する意欲の乏しい生徒が見られる。 		
達成目標	① 学習・授業アンケートで「学習・授業において、自分の考えや疑問を伝える努力をした」と回答した生徒の割合 85%以上	② 互見授業アンケートで「生徒が質問しやすいよう授業改善に取り組んだ」と回答した教員の割合 90%以上	
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 授業における生徒とのコミュニケーションを深め、質問しやすい授業の工夫を目指す。 適切な課題を準備し、着実な取り組みにつなげることで学習内容の定着を図る。 生徒によっては、通信制講座の活用など、多様な学習機会を確保できるようにする。 タブレットの効果的な活用等、授業改善に取り組み、授業のユニバーサルデザイン化のさらなる推進を目指す。 互見授業等を通して教員相互の意見交換を密にし、授業改善を図る。 観点別評価の導入により、指導と評価の一体化を図り、生徒が主体的に授業に臨めるようにする。 		
達成度	① 77%	② 100%	
具体的な取組状況	<p><授業改善・教員研修等></p> <ul style="list-style-type: none"> となみ野ユニバーサルデザイン(TNUD)として、ユニバーサルデザインとコミュニケーションを大切にした授業の工夫に努め、すべての生徒にわかりやすく、質問しやすい授業づくりを目指した。 例) ペアやグループでの活動がスモールステップとなって、生徒が授業中に発言しやすくなるように工夫した。 多くの授業でICTを活用することで、生徒にとってよりわかりやすい教材提示や説明に努めたり、意見や質問も他者と共有しやすしたりした。 生徒がアンケートで質問しやすいと回答した取組を共有し、授業改善に活かした。 互見授業期間中、積極的に授業を参観し合い、各自の授業改善に活かした。 <p><生徒への働きかけ></p> <ul style="list-style-type: none"> 集会等での講話や注意喚起により、生徒自身がコミュニケーションの大切さに気づいてTNUDを積極的に活用するよう促した(主体的な学び)。 日々の授業で自分の考えや疑問を伝える努力を重ねることで、生徒が自立に必要なコミュニケーションの力を伸ばし、自身の学びを深めることを支援した。 		
評 価	B	ほぼ目標を達成した	A 目標を達成した
学校評議員の意見	となみ野ユニバーサルデザイン(TNUD)を意識したICT活用や互見授業により、授業改善が進められている。特に、疑問や意見を発言しやすい授業づくりに重点をおいており、ペアワークやグループ活動、タブレット機能の活用等に効果が見られ、今後も継続して欲しい。		
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 生徒自身が質問や意見を伝えるコミュニケーションの必要性や有効性をより強く感じられる工夫を授業の中に多く設け、自発的な学びの意欲向上につなげたい。 ペアやグループで意見を交わす、タブレットの共有機能を活用する、生徒が教員に1対1で質問できるように配慮するなどの生徒のニーズをふまえ、生徒が質問や意見を気軽に伝えられるような環境をさらに整えていきたい。 多様な生徒の増加に伴い、個に応じたよりきめ細かく学習の支援を行えるようにしたい。 		

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:達成できなかった)

重点項目	学校生活	
重点課題	① 安全意識の高揚、適切な「スマホ」利用に対する意識高揚	② 心と体の健康状態について関心をもち、自己理解を深める
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 登下校時や休み時間にスマホを操作しながら移動する「ながらスマホ」の生徒が多く見られる。事故の被害者にも加害者にもなり得る状況である。生徒自身が「ながらスマホ」の危険性を十分に理解し、安全意識を高める必要がある。また、授業時間以外に「スマホ」が手放せない生徒が多くいる。「スマホ」の長時間利用による健康被害も周知しながら、校内での友人とのコミュニケーションの時間を大切にできるように意識させたい。 望ましい生活習慣について考えることが少なく、それを知っていても行動に移せないために、体調不良を訴え遅刻や欠席をする生徒が見られる。加えて、不登校経験や学習経験の乏しさのため、自信がなく、人間関係を築くのに時間がかかる。自分の長所や短所等の自己理解を深める必要がある。 	
達成目標	① スマホ等適切利用に関するアンケートで、各自の設定目標に対する自己評価において、 70%以上	② 生徒向け研修「心と体の健康講座」に対する事後アンケートにおいて、「心身の健康保持に対する意識が高まった」「自己理解を深めることができた」と回答した割合 いずれも70%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 全校生徒対象に交通安全教室を実施し、「ながらスマホ」の危険性について理解を深めるとともに、命の大切さと交通ルール遵守への意識を高める。 自転車通学者に対しての車体検査で、ヘルメット着用の呼びかけを個別に行う。 スマホに関する各自の目標を設定し、定期的なアンケート調査により生徒の実態を把握し、適切な利用意識の高揚を図る。 事故を未然に防ぐため、日々の場面毎の声かけ、全校集会や年次集会等の様々な機会を通して普段の行動を振り返る場面を設け、安全意識の定着を図る。 日々の場面毎の声かけ、ポスター掲示や動画、ユーチューブ等を活用し、スマホの使用マナーや「デジタルデトックスの意義」について考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各年次の生徒状況に応じて「心と体の健康講座」を実施することで、自己肯定感を高め、自分の長所や短所等の自己理解を深める。 外部の専門家による講座を通して生徒が自己理解を深め、命の大切さや心身の健康保持に必要なことをより詳しく知る機会を得られるようにする。 早期に全員対象の「新入生カウンセラー面談」を行い、生徒が相談室を利用しやすい環境を作る。また、スクールカウンセラーを講師に起用した講座を実施することで、相談室を普段利用しない生徒の自己理解につなげ、困った際に相談しやすい態勢を維持する。
達成度	① 82.7%	② 順に 93.3% , 95.9%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 交通安全教室で「ながらスマホ」が被害者だけでなく、損害賠償を伴う加害者にもなることや自転車のスマホ罰則強化等の話を聞いた。 スマホに関するアンケート結果を分析し、考察を記載したプリントをクラス掲示した。また、担任や生徒指導部長が結果について話をした。さらに、結果を受け自己目標設定に対して自己評価を行う「スマホ等適切チャレンジ！」を実施した。 長期休業前の生徒集会やプリントで、「自転車の安全走行やヘルメットの着用の勧め」「スマホ等の適切な利用」「安心安全な学校生活に大切なこと」等の話をした。また、廊下等での「ながらスマホ」利用者への個別の声かけを行った。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感や自己理解、周囲との関わり等について生徒の実態を把握し、講師のSCと内容・活動形式・実施時期を検討した。そして、人間関係づくり・自己理解・他者受容・コミュニケーションについての講座を実施した。 外部講師のがん教育出前授業では、若年層のがん経験者から話を聞くことで、命の大切さや心身の健康保持に対する意識が高まった。 講座実施後に、感想を記入したり、講座についてまとめた掲示物を作成したりして、活動を振り返り自己理解につなげた。
評 価	A 目標を達成した	A 目標を達成した
学校評議員の意見	アンケート結果の考察掲示や講話、「スマホ適切利用チャレンジ」等の指導により、行動に改善が見られた。引き続き「ながらスマホ」の危険性やヘルメット着用の意義を啓発して欲しい。	生徒の実態に応じた「心と体の健康講座」は目標達成度も高く評価できる。今後は生徒がSOSを発しやすい環境と教職員員の早期発見・対応の体制整備もお願いしたい。
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 自転車運転時のヘルメット着用者を増やすための取り組みや工夫。 「スマホ等適切利用チャレンジ！」における目標設定が前進できるようにするための取り組みや工夫。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の心理状態や健康状態、集団活動での様子について把握し、実態に沿った講座を実施できるようにする。そのために、生徒の抱える困難や変化について情報共有を密に行い、必要な講座内容や支援を十分に検討して対応していきたい。 3・4年次生は、進路学習にも大切な講座のため、前期と後期に「心と体の健康講座」を実施する。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：達成できなかった)

重点項目	進路支援		
重点課題	適切な進路目標を設定し、進路実現に必要な能力の育成を図る		
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・ 進路に対する意識が希薄で、明確な目標を持っていない生徒が見られる。 ・ 進路実現に必要な基礎学力および社会性が不足している生徒が見られる。 ・ 進路目標が多様であり、特別な支援を必要とする生徒も見られる。 		
達成目標	① 卒業予定者の進路目標達成率 100%	② 1月の進路希望調査で、進学・就職を明確にできる生徒の割合 1年次75%以上 2年次90%以上	
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 進路特別講座（進路ガイダンス、社会人講話、学校・企業見学会、先輩講話）およびインターンシップを事前・事後指導を併せてきめ細かく行う。また、進路ノートの活用を各年次に周知徹底し、段階的に情報を蓄積することにより、目標とする進路を明確にする。 ・ 卒業予定者に対して、就職支援教員（JST）や校務運営委員とも連携し、進学・就職試験に向けた面接指導・小論文指導を個別に実施し、社会人として求められる基本的なマナー、コミュニケーション能力および自己表現力を身に付けるよう指導する。 ・ 基礎学力コンテストやキャリアアッププロジェクトの実施を通じて、進路実現に必要な学力の育成を図る。さらに、進路決定者においても進学・就業意欲を継続させ、進路先への円滑な移行を目指す取り組みを行う。 ・ 特別な支援が必要な生徒には、年次をはじめ通級指導担当教員や保健厚生部と連携し、生徒の適性に十分配慮したアドバイスを行う。 		
達成度	① 91% 【進学19名, 就職13名】	②	【1年次】 89% 【2年次】 97% (1/10現在)
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校内での進路ガイダンスの実施に加え、先輩講話や学校・企業見学会を実施することによって、生徒はより具体的な進路先へのイメージをもったり、意欲を高めたりすることができた。 ・ インターンシップの実施においては、生徒の希望を調査した上で実習先を選定するなど、生徒にとってより充実した体験となるよう配慮した。 ・ 3年次の進学希望者には、面接、小論文、学習の必要なプログラムを用意し、柔軟な体制で個別指導を行った。就職希望者には担任との面談、JST面談、保護者会を通して適切な進路目標をもてるようにした。就職試験対策においては校務運営委員を加えての面接練習を実施した。また、2・3年次の来年度卒業予定の就職希望者に対してJST面談を行った。 ・ 特別な支援が必要な生徒に対する支援体制が構築できつつある。外部機関の協力を得ながらチーム支援を行い、生徒の実態に応じた進路目標達成を実現することができた。 		
評 価	B	目標をほぼ達成した	A 目標を達成した
学校評議員の意見	生徒の希望に応じたインターンシップなどきめ細かな取組は評価する。進路意識が希薄な生徒は自己理解不足であり、進路支援には保健厚生部や外部機関との連携を継続して欲しい。また、多様な生徒の現状において、就労移行支援事業所等が「進路未定」には違和感がある。		
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 就職希望者への支援は、早い時期から年次職員を中心としながら、JSTや校務運営委員と連携して、学校全体で行う必要がある。また内定後についても、就業への意欲を継続できるような指導が必要である。 ・ 進学希望者の学力向上と学習意欲の持続ができるようキャリアアッププロジェクトを見直し、教科・年次横断的な指導体制の充実が求められる。 ・ 特別な支援を必要とする生徒の就職支援体制の構築だけでなく、本校に適したメソッドを定着させることが課題となる。今後も支援機関・企業・進学希望校と十分情報交換を行い、進路指導に当たる必要がある。 		

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：達成できなかった)

重点項目	特別活動	
重点課題	① 学校行事への積極的な参加と達成感	② 図書館の有効な活用
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 人とのコミュニケーションや集団活動そのものに苦手意識を持ち、学校行事への参加に消極的であったり、参加できなかったりする生徒が見られる。また、生徒数の増加に伴い、一人一人への配慮がより必要となっている。 生活環境の変化や様々なメディアの発達・普及などを背景に「読書離れ」が進んでいる。読書を始めた「活字を読む」ことの習慣化や質の向上を図るための支援が必要である。 	
達成目標	① 主要学校行事の事後アンケートで「積極的参加」「達成感」等の4件法評価を実施し、「よい」と回答した割合 90%以上	② 1年間の貸し出し冊数 全校生徒の60%以上が一人1冊以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 校訓「発見、挑戦、創造」に基づき、学校行事への積極的な参加を促す。 生徒会が主体となり行事の企画・運営を行う。 生徒自身の学校行事における役割の自覚を促し、一人一人が達成感を持てるような配慮や働きかけを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> より多くの生徒の興味・関心やニーズに合わせて図書を選定する。 図書委員会による「図書館ニュース」の発行やイベントの企画など、来館者増加のための取り組みを行う。 図書の展示方法を工夫し、読書への興味・関心を高める。
達成度	① 97.5%	② 48.2%（長欠者を除く）
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 前年度のアンケート結果を参考に、生徒会執行部が主体となって各学校行事の企画・運営を行った。 生徒一人一人が自分の役割を確認・理解して積極的に参加することで、集団活動等を経験することができ、自分の存在感や充実感を体感することができた。 行事終了直後にアンケートを実施し、回収率は90%であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度の一人1冊以上は45.8% 今年度の生徒利用者数は55名（R5は50名） 生徒の貸出冊数は165冊（R5は255冊） 図書委員会では図書整理、本のポップ、図書館ニュースの発行、教養講座を企画。キャンパスフェスティバルではポップバトルや本探しくイズ、しおり作りを企画。多くの人が図書に親しめるよう工夫した。 生徒や教員の意見を元にした本の購入、定期的な企画展示等、様々な本に興味を持ってもらえるよう努めた。
評 価	A 目標を達成した	B 目標を達成できなかったが、生徒の利用者数は増加した。
学校評議員の意見	生徒会主体の企画・運営が生徒の積極的参加や達成感につながっている。様々な体験を通して主体性や社会性を育成するとともに、集団活動が苦手な生徒には成功体験を積み重ねて欲しい。	本に触れる様々な企画の工夫は評価できる。最近人気の大人が親しむ「絵本」はどうか。また、図書館には不登校生徒の居場所になるような工夫（校内カフェなど）や催しも考えられる。
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 集団活動への参加等について苦手意識や経験不足を感じる生徒が多いため、各学校行事において、年次や教職員と連携を図りながら積極的な参加を促し、様々な体験を通して主体性や社会性を育てていきたい。 近年、生徒数の増加傾向がみられ、今後も状況に応じて各学校行事の在り方や企画・運営について工夫・検討を重ねて行うことが必要である。 事後アンケートの回収率が上がるよう、生徒への働きかけをしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 購入図書の選定や企画展示、館内の配置やディスプレイおよび各種イベントを、今後も引き続き生徒の要望や興味を元に企画し、生徒が生徒に向けて発信していく活動ができるように指導していきたい。 ネットの普及で本離れが進む中、読書の動機付けをどう行うかが課題である。長期休業前の貸出PRや、HRや授業との連携等を行っていききたい。また、読書の成果を見える化する等、読書を習慣化させる方法も検討していきたい。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：達成できなかった)

重点項目	その他:総合福祉科学習指導			
重点課題	専門科目への意欲的な学習			
現 状	「地域で活躍する人材の育成」を指導目標としている。日々の授業の中で衣食住や介護の知識・技術を定着させたり、家庭・地域生活や福祉のあり方を考えたりすることに努力を要する生徒が見られる。			
達成目標	① 授業及び地域との交流活動を通じて福祉分野への興味関心が深まった生徒の割合70%以上		② 衣食住の学習・実習を通して、自分の生活をよりよくするための知識・技術が身についた生徒の割合70%以上	
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 地域での交流活動に参加することで、生徒の福祉分野に対する興味関心を深める。 日々の授業で学習した専門科目の知識・技術を地域での交流活動に活かすことで、今後の専門科目の学習に意欲的に取り組めるようにする。 活動報告会を実施し、今後の専門科目への意欲向上や技術向上に役立てる。 授業内で校外での活動を意識した挨拶・礼儀等を意識して指導する。 個別の配慮を要する生徒に対する指導について工夫する。 			
達成度	① 100%		② 100%	
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 福祉に関する講義や交流活動を例年よりも多く設定した。また、家庭科分野に関する講義や体験活動も多く設定することができた。 キャンパスフェスティバルの運営、総合福祉科全員で参加する交流会等を通して学年を超えて協働活動を行う場面が多く見られた。 介護実習やボランティア活動、交流活動等の事前学習の中で、目標や身につけてほしい力等を具体的に示すことで生徒一人ひとりが活動に対する目的意識を明確にして取り組むことができた。 			
評 価	A	目標を達成した	A	目標を達成した
学校評議員の意見	福祉や家庭科に関する講義や交流・体験活動が多く設定され、生徒には貴重な経験となっている。興味関心を深めながら基礎知識を学ぶ取組がしっかりとできている。目標達成度が100%であるため次年度は目標の変更をお願いしたい。			
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 活動や体験内容がその時間で完結するのではなく、学んだ知識や経験を次の活動や学習に生かしていくなど、系統的な指導計画を作成する。 様々な活動を経験しながら活動に対する自己評価、他己評価を通して、生徒自身が自分の成長を実感できるような学習機会を設定する。 総合福祉科の特性や活動内容を十分に理解しないまま入学してくる生徒もいるため、これまで以上、外部に対して総合福祉科の活動内容を紹介していく必要がある。 			

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:達成できなかった)